

会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和7年度 第1回キャリア教育推進委員会		
事務局 (担当課)	学校教育課 電話042-769-8284 (直通)		
開催日時	令和7年5月16日(金) 15:00~17:00		
開催場所	市民会館 第2大会議室		
出席者	委員	21名(別紙のとおり) ※欠席2名	
	その他		
	事務局	10名 学校教育課 6名 教育センター 4名	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	1名
議題	1 確認事項 (1) 本市のキャリア教育について (2) 令和7年度の方向性について (3) 令和7年度キャリア教育推進委員会等の日程について 2 審議事項 「令和7年度キャリア教育推進の重点施策について」 3 協議 「子どもたちに 未来を切り拓く力を育むために わたしたちができること」		

令和7年度相模原市キャリア教育推進委員名簿

氏名	所属役職等	出欠席
藤田 晃之	筑波大学人間系 教授	出席
原 晋	青山学院大学地球社会共生学部 教授	出席
榎本 幸良	相模原市社会福祉事業団	出席
布施 昭愛	相模原商工会議所	欠席
鎌倉 慎一郎	公益社団法人 相模原法人会	欠席
河合 優輝	公益社団法人 相模原青年会議所	出席
岡本 愛子	相模原公共職業安定所	出席
中村 岳彦	相模原市P T A連絡協議会	出席
浅倉 勲	相模原市立小学校長会	出席
及川 秋人	相模原市立中学校長会	出席
農上 勝也	学校教育部長	出席
小中 信幸	区政推進課長	出席
奈良 美幸	高齢・障害者福祉課長	出席
土元 健一郎	こども・若者政策課長	出席
田中 宏昌	産業支援・雇用対策課長	出席
歌田 平	創業支援・企業誘致推進課長	出席
沖本 健二	教育総務課長	出席
西内 一裕	支援教育課長	出席
菅原 勝	学校教育課長	出席
北村 綾	教育センター所長	出席
今野 裕之	生涯学習課長	出席

議 事 の 要 旨

[議事内容、質問及び主な意見] ●委員 ○司会

1 開会

(1) 学校教育部長あいさつ

本市のキャリア教育は、相模原市教育振興計画 基本方針(1)目標(1)「未来を切り拓く力の育成」の筆頭の施策として位置付けており、現在各学校においては教育活動全体を通じて社会的・職業的自立に向けた必要な基盤となる能力や態度を育てている。本市のキャリア教育の推進は今年度からフェーズ3に入り、各校や各中学校区において「目指す子ども像」の具体の設定や、小・中学校で系統性のある目標設定、地域と連携・協働した教育活動など様々な取り組みが行われており、成果が出ていると捉えている。また、学校と行政関係機関が協力しながらキャリア教育の推進について考える本会議は、本市の大きな特徴であり強みの一つであると捉えている。本日は藤田教授、原教授をはじめ、委員の皆様から忌憚のないご意見をいただき、令和7年度本市キャリア教育の推進につながる充実した会にしたいと考えている。

(2) 委員の自己紹介

2 確認事項

- (1) 本市のキャリア教育について
- (2) 令和7年度キャリア教育について
- (3) 令和7年度の方向性について

○資料について事務局から説明

3 審議事項

(1) 令和7年度キャリア教育推進の重点施策について

- 西内委員 相模原市の特別支援学級に在籍する児童生徒数は10年前に比べて約2倍以上に急増している。そのような中で相談しやすさであったり同じ課の中でいち早く情報共有したりして施策につなげていく形で支援教育課を新設させていただいた。キャリア教育とともに特別支援教育を推進していきたいと思っている。
- 菅原委員 ギフテッドと言われる特異な才能をもつ児童生徒や日本語が不自由な児童生徒など、多様な対応が求められている。誰一人取り残さない教育を進めていくことについて、教育委員会や教員だけではなく、学校運営協議会やコミュニティ・スクール等、色々な地域の方々と横の連携を深めながら進めていくことが大きなポイントとなる。本日お集まりいただいた皆様を含め、ご意見をいただきながら進めていきたい。
- 今野委員 地域学校協働活動に関しては、協働活動の推進委員が大切になってくる。いかに地域と学校を結びつける仕組みをつくるかということがとても重要であり、推進委員の方一人に全てをお任せするのではなく、地域全体で仕組みづくりを進めていきたいと考えている。
- 中村委員 子どもたちのためにこのように考えていただき、皆様に感謝申し上げたい。家庭だけでは子どもを育てることに限界を迎えている中、学校と地域とが一体になって子どもたちの自己肯定感を高める場をいただいている。「大人になるのが楽しみだ」という体験は家庭のみでは全部伝えきれない。引き続き来年度以降についてもご尽力いただければと思います、冒頭に感謝の気持ちを伝えさせていただきました。
- 藤田委員 結果が右肩上がりであり、これを実現できる自治体はそうはないと捉えている。相模原の先生方が心を込めて学校教育に取り組んでいることがよくわかる資料となっている。将来に目標を持っている児童生徒の割合については、他と比べて伸びがないように見えるが、私はそうは思っていない。家庭の収入が激減したり、地域の様子のがらりと変わったりした

コロナ禍で数値が下がっていくと予想されたが、令和3年度以降の伸びは非常に大きな成果だと捉えている。最も感動したのが 中学3年生の生徒たちが「先生から認められている」と肯定的な回答をした割合である。思春期を迎えて難しい時期だったり受験を控えて不安定になったりする子どもたちがこれだけの回答率を出していることは、相模原の先生による努力と実践の賜物だと思っている。令和7年度のフェーズ3に向けて小中の連携、地域との連携を高めていく必要があり、設定した目標を子どもたち自身がきちんと理解できれば、保護者の方々への理解にもつながる。そして子どもたちと保護者が理解できれば、地域の方と共有することも容易になってくる。つまり、その学年ごとの子どもたちがきちんと理解できる目標を設定し、それがめあてになるような目標になって初めて「オール相模原」の地域教育力の向上に結びつくのではないか。さらに学校運営協議会の活動が何を目指しているのかを明確にし、目指す力を子どもたちの目線で保護者や地域と共有していくことをPDCAサイクルとして繋げていく必要がある。

- 原委員 「認知能力」、いわゆる偏差値的な暗記型の教育は一定の教育水準を満たしてきたが、インターネットの普及や生成 AI などが発展してきた中で、今まで人間が時間をかけて作ってきたものがコンピューターによって短時間で整理・達成されてしまう時代になってきている。今後必要になるのは「非認知能力」である。いわゆる意欲・忍耐・自律・自制・協調・共感等の心根の教育、自ら考え行動する能力が大切となってくる。生きていく中で時には挫折することもあると思うが、例えばそこから這い上がっていく強さ、そういった教育がこれから求められ、その教育の一端がこのキャリア教育にあると実感している。7~8年前から相模原市のキャリア教育のカリキュラムが、これだけの体系的な整備が進められていること、大変素晴らしいと思っている。初めてこの会に参加する方は自信を持って取り組んでほしいし、相模原市の子どもたちにとって良い取り組みをしているという自覚を持ち、一緒に頑張っていきたい。

4 協議

テーマ「子どもたちに未来を切り拓く力を育むためにわたしたちができること」

Aグループ

藤田委員（筑波大学） 菅原委員（学校教育課） 榎本委員（社会福祉事業団）
奈良委員（高齢・障害者福祉課） 沖本委員（教育総務課） 今野委員（生涯学習課）
中村委員（PTA 連絡協議会） 浅倉委員（小学校長会） 北村委員（教育センター）
歌田委員（創業支援・企業誘致推進課）

- 浅倉委員 淵野辺小学校では、学校運営協議会を年5回開催しており、コミュニティ・スクールの導入により、子どもたちの学びが豊かになっている。障がいのある方を雇用している近くのパン屋さんに伺い、販売の手伝いなど、貴重な経験をさせていただいている。また、近くに大学があることも非常に大きい。青山学院大学の学生さんに、スポーツテストの補助をしてもらったり、麻布大学の学生さんが、淵野辺小学校に動物を連れてきてくれたりした。麻布大学にとっては、動物セラピーの研究にもつながったようで、WINWIN の関係が築けている。桜美林大学では、学習を進めてきた内容を大きなスクリーンで発表する機会をいただいた。例年通りの取組をただ繰り返すのではなく、その年、その年の子どもたちの想いを大切にしながら、学習のカリキュラムを設定していくことが大切で、それを実現できるコミュニティ・スクール等の取組はとても貴重だと考えている。
- 榎本委員 社会福祉事業団でも、パン屋の運営をしている。地域の方がお金をもってパンを買いに訪れることなどから、お店の仕組みやお金の流れなどを考えることは、キャリア教育にも通じると考える。また、最近では、健常者の方が、障がいのある方の困り感を考え、どのような支援をしていけばよいのかを考えるような雰囲気広がってきていると感じる。小中学生の授業の中で、このようなことについて考える機会を作れるとよいと思う。
- 奈良委員 障がいへの理解促進という点では、インクルーシブ教育の推進により、小中学校でも進んできていると承知している。キャリア教育については、障がいの有無に関わらず、その

理解が進むことを期待している。また、高等学校を卒業した方で発達障がいのある方について、その先の学びの場が少ない状況がある。発達障害支援センターでは、相模女子大学と連携して、そのような方々を対象とした学びの場の提供を行っている。

- 歌田委員 毎年、さがみはら子どもアントレプレナー体験事業において、起業の模擬体験ができる場を提供しており、先日、第1回実行委員会が開かれた。市も補助金を出しているが、地元の企業からは100を超える企業から協賛金を出していただいている。企業の方には、できればこの地で企業をし、次の世代につなげてほしいという強い願いがある。今後も、企業とうまく連携し、地元の子どもの育成を助けていきたい。
- 菅原委員 相模原は、地元を離れている子どもたちが多いという話は聞いたことがある。相模原を離れて生活することが悪いことではないが、地元で活躍する子どもたちを大切にしていきたいと思う企業の想いには共感する。
- 中村委員 自分自身も相模原の商店街の中で育った。大人になってわかることは、親だけでなく、地域に育てられたということであり、そのことを、今、強く実感している。親が子どもに対して抱く真の願いは、子どもに幸せになってほしいということである。子どもには、自分は幸せであるということに気付いてほしいが、そのためには、大人たちが、今、当たり前にある日常がとても幸せなのだということを、子どもたちに伝えていくことが大切だと思う。子どもの頃の様々な経験や体験は、その後の成長に大きく寄与するものと考えており、それを支えているのがキャリア教育であると考えている。
- 藤田委員 今、この場でたくさんの大人が子どもたちの幸せを願い、真剣に話している。この状況こそがキャリア教育を進めるうえで、とても大切なことである。子どもたちの成長にとっては、大人が普段から笑顔でいることがとても大切で、子どもたちは大人たちの姿をよく見ている。
子どもたちは普段、重い障がいのある方と接する機会をあまりもっていない。そのような環境においては、障がいのある方の「しんどさ」について理解することはとても難しい。外国籍の方やLGBTQ+といったマイノリティの方々などへの理解も同様で、そのような方々の立場や「しんどさ」を理解した上で、みんなで楽しく生きていくためには、どうすればよいのかを考えることがとても重要であり、その土台として少数派の方々と触れ合う機会を意図的に作っていくことがとても重要である。
- 今野委員 子どもの成長を見守る場は、昔は、当然のようにあり、時には近所の大人が子どもを叱るような場面もあって、子どもたちは、そのような社会の中で社会性、規範意識を身に付けていった。いつからか、子どもを地域で見守るという意識は変わってしまい、地域の大人が近所の子どもを注意しようものなら、不審者扱いをされてしまうような時代になってしまった。キャリア教育を通じて、地域の方がその地域に住む子どもたちを見守ろうとする意識が高まることについては、とても良いことだと感じている。本課としては、地域の方々が学校に寄り添い、学校が求めていることを地域に発信して、学校と地域とをつないでいくような取組を積極的に進めていきたい。
- 北村委員 平成30年に富山県で藤田先生が講師であったキャリア教育の研修を受けた。その時は、キャリア教育に対する理解が十分でなく、「キャリア教育って何？」といった状況であったが、昨日行われたキャリア教育担当者会において、本校のキャリア教育担当者が、自分の言葉でキャリア教育を力強く語る姿に感心するとともに、キャリア教育が広く浸透してきていることに感慨深いものを感じている。本日、様々な立場の方が集まり、子どもたちのために熱心にご議論いただいていることを目の当たりにし、とても頼もしく思う。教育センターでは、中学校区ごとの強み弱みを把握し、その学校区にあった支援をしていきたいと考えている。
- 沖本委員 地域学校協働活動とコミュニティ・スクール推進事業について、これまでは、別々のモデル事業という形で進んできたが、本格的な事業に移行するに当たり、これら2つの事業

は一体的に進めていくことが重要になる。大切なことは、共通のビジョンをもって取組を進めることであり、この点については、教育委員会としてしっかりと進めていきたいと思う。

- 沖本委員 コミュニティ・スクールの推進に当たっては、推進委員が要であり、この役割を担っていただける方の確保が喫緊の課題となっているが、どのように進めていけばよいか、藤田委員に伺いたい。
- 藤田委員 コミュニティ・スクールの推進委員は、推進委員としての価値を実感しづらいものである。しかしながら、兵庫県では、好事例が報告されている。兵庫県のいくつかの自治体では、推進委員が学校運営協議会で発信した意見が学校運営に反映され、その結果、子どもたちが成長した様子を見られたことで、2年目、3年目と、年を追うごとに生徒たちの様子、学校の様子が変わってきたということである。ここでのポイントは、子どもたちの成長を見る視点、いわゆる「ほめポイント」を、学校の教員が地域の方々にもわかる言葉で説明した点にある。地域の方に「ほめポイント」が伝わったことで、地域の方が子どもたちを認め、励ますことにつながり、子どもの成長を見取った上で認めることができたという実感が得られることになった。このことは、負担感にも増して達成感につながるものとなった。（藤田委員）

Bグループ

原委員（青山学院大学） 農上委員（学校教育部長） 岡本委員（公共職業安定所）
小中委員（区政推進課） 田中委員（産業支援・雇用対策課） 河合委員（青年会議所）
及川委員（中学校長会） 土本委員（こども・若者政策課） 西内委員（支援教育課）

- 農上委員 本日の協議について、委員の皆さんが現在取り組んでいる、また今年度取り組もうとしていること等を紹介していただきたい。相模原市で育みたい4つのキャリアの力に関連して委員の皆さんからのお立場でどのような取り組みをされているのか、もっとこういうことができるのではないかといったご意見をいただきたい。
- 河合委員 相模原青年会議所では、今年は若者の居場所づくりと街の大人と繋がるということを行っている。5月10日には上溝小学校と上溝公民館でJCのメンバーと上溝商店街の方が一緒に21の職業体験のブースを出させていただいた。参加者の目標は200名だったが、実際には260名ほどに来ていただいた。参加した子どもたちからは「職業がいろいろと知れてよかった」「次回あったら必ず来たい」という言葉をいただいた。また、月に1回、上溝公民館でプログラミング教室やアート教室、ゲーム大会などを開催している。私自身プログラマーだが、これからAIによって答えが簡単に出てしまう時代になってくる。その中で、試行錯誤しながら自分で調べたり聞いたりして解決していく能力が求められる。
- 農上委員 参加していた時の子どもたちの様子について伺う。
- 河合委員 一生懸命やっている。同じ地域の子どもたち同士で新たな繋がりが生まれたり、自分なりに課題解決に取り組んだりする姿が見られている。
- 農上委員 他の皆さんからも子ども達が参加しているような取り組みを開いているところがあれば伺いたい。
- 田中委員 昨年度、橋本公民館で市内の事業者に協力していただき、市内の中学生・高校生をメインターゲットに職業体験Expoを開いた。今年度についてはまだ未定だが、対象年齢を広げて小学生の高学年も含めた企画を現在検討しており、直接企業の話を開いたり体験したりする場を作っていきたいと考えている。
- 農上委員 参加する事業者側のメリットについては、どのように考えているか。

- 田中委員 事業者側によってそれぞれ意図は違うと思うが、地域でこのようなことに取り組む事業があるということを知らせるいい機会だと捉えている。このような会社があると興味を持ってもらうことで、産業の発展にもつながるメリットがあると考えている。
- 農上委員 職業体験は中学生で主に取り組まれているが、実際の中学生ではどのような姿が見られるか。
- 及川委員 相模原市の中学校全体としては、1/3 ぐらいが3日間、残りの2/3 ぐらいが2日間の職場体験の日程をとっている。私の学校は2日間で取り組んでいたが、来年度からは3日間にしようと考えている。職場体験を通して、働いている人の気持ちや思い、仕事へのやりがい等、そういったものを感じ取ることで次につながれると考えている。
- 農上委員 2日間と3日間で違うものか。
- 及川委員 違う。1日目は教えてもらう、話を聞く。2日目は教えてもらいながら作業をすることで終わってしまう。3日目になると自分で考えて自分なりに取り組んでみるという自主性が高まってくると考えている。私としては3日間の方がいいと考えている。
- 土元委員 「こども基本法」が施行されてから、施策について検討していく際には子どもや若者の意見に耳を傾けて取り入れるようにしてきた。昨年度は、我々が直接小・中学校や高校に赴いて、子どもたちから意見を直接伺う取り組みをした。子育てや自分たちの権利、地域に求めること、こうなってほしいという願い、それを改善するために自分たちや地域が何ができるのかということ等について聞き、非常に盛り上がった。
- 農上委員 今、様々な場所での職場体験について話があったが どのように感じているか。
- 岡本委員 相模原地域はものづくりに特色があり、製造業や建設業が多いが、子どもたちは自分にとって身近なものでしか職業を捉えることができていると感じている。例えば食べ物を作っているメーカーだとそれなりにイメージは持てるが、自動車の部品の一部を作っている企業だと生活で接する機会があまりないので、子どもたちの興味関心が薄い傾向がある。だからこそ小学生の年代から身近なものに興味をもったり関心を広げたり体験する場を増やしたりすることで、視野を広げる必要があると感じている。
企業から聞いた話では、電気会社に勤める新入社員の親御さんも同じ職種とのことで、認知されづらい職種については親御さんがそういう仕事についていないと知る機会を持ちづらいのではないかと感じた。その電気会社では、大きな建物を作るためには電気が必要なのだということを知ってもらう機会として中学生の職場体験を受け入れ、市内中学校4校ほどが実施した。作業を進める中で、すぐに覚えられる生徒とそうではない生徒がいたが、うまくできない生徒にどのように教えるかを考えていくことが従業員にとって大事なことだということを実感し、「このように教えたらできるようになりました」という声をいただいた。中学校の職場体験の取組をぜひ今後も続けてほしいと願っている。
- 及川委員 私たち中学校が職場体験で大事にしていることは礼儀や挨拶であり、社会性を学ばせていきたいと考えている。生徒たちは「挨拶の大切さが初めてわかった」「ありがとうと言ってもらえることに喜びを感じた」と振り返っており、学校の中でも感謝の言葉や挨拶が社会に出たときに大切になることを実感したという声が上がっている。学校側にとっても子どもたちの社会性を伸ばす上で メリットが大きいと考えている。
- 小中委員 社会の中でいかに自立していくかという支援をしており、消費生活総合センターとして学校に出向いて消費生活についての出前授業を行っている。例えばゲームの課金トラブルやエステを50万円もかけて契約してしまう事例など、騙されてしまうトラブルがある。そのよ

うな生活上のトラブルの周知やいかに防いでいくかの対策等について考えさせていくことを行っている。学校側も忙しいと思うが、こういった消費生活の出前授業を行っていることをぜひ知っておいてほしい。

- 農上委員 とても大事な取り組みだと思うが、もっと広げていくにあたっての課題はどんなところだと考えているか
- 小中委員 私たちとしてはどうしても「待ち」の状態になり、学校側としても出前授業を計画したり受け入れたりするようなゆとりがないことはよく理解している。まずは学校に周知していただき、トラブルを未然に防ぐ出前授業を活用していただくと共に、保護者にも知らせることで市内に相談機関があるということを知ってもらえればと思っている。
- 農上委員 今のそういった消費者教育に関して学校の生徒たちの実態はどうか。
- 及川委員 情報に流されてしまうところはあると考えている。今までは「自ら考え行動する力」が大事だと思っていたが、これからは「自ら考え 判断し 行動する力」が大事だと捉えている。要は判断能力が重要であり、何でもすぐに行動に移すのではなく、正しい判断ができることが大切である。ある新聞記事で、生成 AI にはメリットがあると同時に人間を騙すようなものもあるという記事を読んだことがある。大事なことは正しいことを判断する力であり、同時に健全な批判力も大事になってくる。日本人はどうしても先生やみんなが言っていることは何もかも正しいと思う節があるが、その情報や行動が本当に正しいのかを考える批判力を身に付けることが必要であり、そうすることで より正しいものを選択できる力が身に付くと考えている。
- 農上委員 今、中学校の先生から判断力・批判力について話があったが、判断力・批判力を児童生徒たちに身に付けさせるためにできることはなんだろうか。
- 西内委員 非認知能力の大切さについては通常学級でも特別支援学級でも一緒だと捉えている。ただ特別支援学級においては、職業的自立というより社会的自立の方が趣旨は強いと思っている。最近では ICT の発達でタブレットが 1 つあればコミュニケーションであるとか to do リストであるとか 自分の精神的なリラクセス効果を高めるアプリであるとか 万能なものが多い。そんなものを活用しながら物であったり、人であったり、横の繋がりを広げたりして、タブレットを含めて人との繋がりも持ちながら、障がい小さくしていくというのが支援教育課であると考えている。非認知能力を高めていく上で、そういう支援も使っているんだよ という弾力性のある考え方をキャリア教育の裏支えみたいな形で広げていくことが、キャリアの力のアップに繋がるのではないかと考えている。そして便利なものには必ずリスクも存在するということを集団の中で学んでいくことがキャリア教育には欠かせないところではないか。
- 農上委員 職業体験の話題から始まり、それぞれの立場から様々な実践例についてご紹介いただいた。今出た意見でもう一度聞いてみたい、また紹介したいことがあればお話をさせていただきたい。
- 岡本委員 ハローワークでは、「職業自立のための保護者セミナー」を相模原で実施する予定。主に小中学校の保護者を対象としており、特に発達に課題を感じている保護者の方は、子どもが将来どうなるのかということに不安を抱えていることが多い。そのような中で、早めに準備できることは伝えていきたいし、子どもたちにできることを大人は見逃さずにいきましょうということで、一緒に連携していきたい。今年は 11 月に開催する予定である。今後はもう少し小さいうちからたくさんの方に仕事に触れさせ体験させることで、「自分のやりたいことは何だろう」ということを広い視野で選択できるようにしていくことが大切である。それが将来「この仕事を選んでよかった」という満足につながるのではないか。

- 西内委員 北欧では学校がすごく弾力的で、単位制みたいなどころがあったり多様な学びの形があったりする。平均就職年齢が27～28歳ぐらいであり、色々なことを経験して力を身に付けてから初めて就職するというのを聞いたことがある。学校教育の中で、キャリア教育を通して児童生徒が非認知能力や基礎的・汎用的能力を身に付けてたくましく社会に巣立っていくために、我々大人の役割は重要だと考えている。
- 原委員 これからは「良い子」の概念を変えないといけない。適切な判断力や健全な批判力を身に付ける必要がある。昔は批判したら先生から怒られるような時代があった。口答えをすることは悪いことだという流れがあったが、それを見直す必要がある。

～総括～

- 原委員 職業観の選択を広げるという話題になり、機会を与えることの大切さを改めて感じた。私の父親が教員だったので、私も職業観の中で「先生になりたい」、部員の中でも「親がしていたから、これをやりたい」という職業観をもつ学生が多い。まずは平等に広く機会を与える、それもジュニア期に与えることが非常に有効だと感じている。日本では9割以上が中小企業で社会を支えており、必ずしも大企業だけが仕事場ではない。それをジュニア期から教えていくことで、日本社会全体が潤ってくることにつながる。一方で、企業も受け身にならず人材を受け入れる土壌をつくる必要があり、積極的にジュニア世代にPRすることが、将来的な人材確保につながるという印象を受けた。

私は、「協調性がない」と言われ続けてきた。常に会議では一番に手を挙げて意見を言い続けてきたが、本当に協調性がないのだろうかと辞書で調べてみた。すると協調性とは、「自分の意見をしっかりと言う」ことが大前提であり、同時に「周りの意見も聞きながら、最後にひとつにまとめていく」とのことであった。自分の意見をしっかりと伝えることは必要な要素であるが、それを言わずして事がまとまっていく、決まった後に批判する流れが今はある。それは同調圧力に負けてしまっていることでもある。「協調性」をしっかりとした言葉で整理して子どもたちに伝え、「自ら考え判断し、行動する力」「健全な批判力をつける」ことがとても重要。

失敗には、「シンプルミス」（時間や約束を守らない・うそをつく等）、「システムミス」（仕組みが引き起こす失敗）、「チャレンジミス」（挑戦して生まれる失敗）がある。「シンプルミス」については、ジュニア期から指導する必要がある。システムミスについては、ミスを引き起こす仕組みそのものに目を向ける必要がある。チャレンジミスについては、初めて取り組むものに失敗は付き物であることを理解する必要があり、真剣に向き合った上でのミスを批判しては、誰もチャレンジしなくなる。チャレンジミスについては、批判せずに挑戦したことを褒める文化をつくるべきだと思っている。その上で失敗をそのままにせず、原因を組織全体で捉えてどう改善していくかということ、指導者や教育者が捉え直す必要がある。

- 藤田委員 これだけ多くの方々が職務を超えて時間を捻出し、ひとつの場に集まって意見交換をするのは何のためか。それは子どもたちの未来のためであり、原委員をはじめ、それぞれの委員が楽しそうに意見交換ができてることが重要だと感じている。子どもたちに未来を切り拓く力を育むために最も重要なことは、「私たち大人が楽しそうに生きていること」ではないだろうか。大人の姿を見て、こういう大人にはなりたくない、こんな仕事にはつきたくないと思わせてしまえば、未来を切り拓く力にはならない。こういう大人になりたいという姿を見せることで、子どもたちに未来を切り拓く力が育まれていく。

誰でもできることは、笑顔で子どもたちに接すること。生きている中で年中笑ってはいられないが、とはいえ充実感ややり甲斐を感じる瞬間は必ずあり、そういった時に子どもが分かる言葉で、子どもが分かるタイミングで伝えていくことが大切だと思う。

協議の中で、障がいをもつ方々との接点を重要視しながら地域との連携を進めていく事例がいくつもあった。生産年齢人口が減ってきている中で、外国にルーツを持つ方や外国から来た方、また文化や宗教が違う、育ってきた背景が違う方々と共に働いていく基盤をつくり、どう接していくべきか考えていく必要がある。そして、生活に「しんどさ」（障がいをもつ、高齢者、外国にルーツをもつ、LGBTQ+等）を抱える方々への感受性を高め、どのように共感してい

くかが重要。

シンプルミス、システムミス、チャレンジミスの話が原委員からあったが、まさにこれはキャリア教育のことであり、チャレンジしたことに対しては褒めるべきだということに共感する。相模原の言葉に置き換えるならば「乗り越える力」であり、チャレンジしたことで失敗をしたならば、それを乗り越えていく力をどうつけていくか、まさにキャリア教育で一番重要なことを原委員が話してくれたと思っている。

5 その他

次回の日程は、令和8年2月5日（木）の実施予定。

6 閉会